

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第155号（2019年4月）

風に吹かれて（132）

白井啓治

・満閑の花だより病室に空しく響く

上顎洞癌で茨城県立中央病院へ入院したのは2月7日。もう少しで2か月になる。鼻腔や眼底に痛みが出て、のんびりと読書三昧というわけにはいかず、物見遊山の入院ではないことを思い知らされる。

入院して知ったのであるが、病室というところは風、光、時に景をつくるのを嫌うところのようである。不自然すぎる穏やかで静かなることを強要されるような気分になって来るのだから不思議である。

これは小生だけなのかもしれないが、穏やかで静かなることに努めようとすればするほど、思考が僻みつぽく黒つぽい灰石膏色に染まってくるようである。テレビ放送されるニュースなどに対しても、嫌みつぽい感想を持つだけで、確りとした論評を持ってなくなってくるのである。

やはり人間というのは、健康に運動疲れをしなくては、思考も不眠症のマイナス思考になってしまうものらしい。それが病というものだとはいえ、それまでだが、嬉しく愉快なことではない。

病は気からとはよく言われるが、病とは気を病むことのようにある。現にこの雑文などでも、勝手にドンドン負のスパイラルを滑り落ちていくように病、病と叫んでしまい、窓に暗幕を張り、光に景を作らせまいとするようである。

だから思考の引き際を失ってしまい、短絡的終焉を作ろうとしてしまうようである。文章としては物語の欠けた味気ないものとなってしまいうようである。隙間だらけの間抜けな文章と言えるだろう。

四月になると平成からバトンタッチされる、新しい年号が発表される。平成になってちようど三十年。年号も非常に良い切り替え時であるうと思う。長過ぎず、短すぎずというところではないだろうか。

しかし、年号の長さはちようど良いと言えるのであるが、天皇自身の年齢からすると、些かというよりは甚だ非人間的と言えるのではないだろうか。人間天皇となったのだから、もっと人間的な任期を与えてしかるべきではないだろうか。

象徴天皇に関する決まり事は、憲法のもと皇室典範に定められているわけであるが、皇室典範の時代不適合を改めるためには、憲法の改正がなければ行えないのである。

昨今、憲法改正論がしきりに言われるようになってきたが、改正論者の興味は九条の戦争放棄のことばかりで、実際に改正の必要な箇所へは目を向けようもしないのだから、国政を担う者たちの如何にお粗末なのか、改めて個々の文句を言うまでもないことである。

二か月余りの入院で、切実に思ったのは、この「ふるさと風」の行く末であった。こんな屁にもならない会ではあるが、お世辞を真に受けてその気になるわけではないが、この石岡市という吾がふる里に於いて、これ程真つ当にふる里と向かい合って自分の考えを表現している集まりはないだろうと思う。

十三年間、毎月発行する会報への投稿は、全員が欠けることなく行っている。見上げたもんだよ屋根屋の禪、と自画自賛しているのであるが、足元の脆さは創刊以来危惧するものである。

もう少しは一人でやれるだろうと思いつながらやって来たのであるが、己の年齢を考え、こうして入院までしてしまうと「ちよつと待てよ、これはいかん！」と現実の厳しさを思い知らされた。

今のところは、木村兄の大きな後押しで、欠けることなく維持できているが、さてさてこれからが問題である。沈潜化していく我が町に合わせて一緒に沈んで行ってしまうのかと思いつ始めると、吾が非力を嘆くばかりとなってしまう。

この先の五月号が完成すると、満十三年となる。テレビドラマでいえば、ワンクールが終わったことになる。全員でどこまで走れるかは不問にし、ふらつく足にムチ打ち、歩けるところまで、の思いである。

命の尊卑の差はなぜ

菅原茂美

「食べる事の真の意味」を考えてみた。すると、突然ぶつかったのは、牛や豚が当然のごとく、なぜ人に簡単に、しかも常習的に殺され続けているのか？ という疑問である。

ペットの犬や猫は「動物愛護法」によりしっかりと護られているのに、なぜ牛や豚はいとも簡単に、しかも常習的に殺されなければならないのかという疑問である。生き物が殺されるために生まれてくるとは何事か。しかも工場での大量生産みたいなシステムで…。牛や豚の食肉化に対する反省について白井先生に相談したら、日本では、「供養」があると教えてもらった。確かに「獣魂碑」はある。西洋ではどんな反省の意志があるのだろうか。外国人が笠間焼の湯飲み茶碗を見て、1個1個手作りなのに驚いていたが、日本人は家畜を1頭1頭丁寧に育てている。いわゆるキメが細かいのである。何を見ても西洋人のモノづくりは、ガサツな感じがする。食肉に関し、生存競争に勝ったから何をしても良い：では済まされまい。まるで昔の戦勝国が勝てば官軍で、言いたい放題。負けた方は、涙を呑んでミノクソになぶられっぱなし。

神の概念は、所詮人間が造ったモノであろうが、命の価値に格差を設けるなど軽率にもほどがある。しかも虫けらや雑草ではない。牛の4胃システムなど、人類などより遙かに進歩した消化システムである。豚は人と同じモグラなど食虫類から進化したかなり人類に似た生き物であるが、五官の鋭さなど犬に勝る。更に羊や海の魚介類など無制限に、殺しまくっている。こんな事を考え始めたら夜も眠れない。他の生物を平気で犠牲にして

何の反省もない。私は獣医師であるから、他の生物の生死に直接かわわっている。牛は殺されるときに涙を流し、豚は殺されるまで反抗心むき出しにして、眼を剥いている。植物だって泣いているかもしれない。弱い動物たちの弁護士になつて、一戦を交えたい心境だ。

人という動物は、生存競争に勝ったからと言って、他の動物をこんなに苛め抜いていいのだろうか。あまり聖人ぶって、自分だけいい子になろうなどとは思ってはいないが、「動物愛護法」とかあるが、犬や猫はいじめてはいけなくて、牛や豚は殺して食べてなら差し支えなしとするのはいかがなものだろうか。魚はいくらでも殺してよいのであろうか。あの小さな「白子」(シラス)カタクチイワシ等の稚魚の一匹一匹にしっかりと目玉がある。

私の箸に挟まれた一匹一匹がこちらをにらんでいる。私は娘を育てるときにシラウオは体に良いからたくさん食べるといって、娘は、ならば、お魚の目玉を全部取ってくれと言われた。その言葉は、小学生ながら、弱い生物の命に同情を感じたからに違いない。50年経った今でも忘れはしない。

人間どんな偉そうな事を云おうとも、所詮食べる為に働き、幼子を育て、教育し、老いた親に孝養を尽くして、懸命に生きていく。衣食住の拡充こそ生きる手段である。敷居を跨げば、外は7人の敵：とか。渡る世間は鬼ばかり：とか。

しかし、周りは敵や鬼ばかりと決めつけるのは、チョイ心が狭くは、ござんせんか？ 自分の心が次第で、決して世間は外敵ばかりとは限らない。自分の心に「誠」があれば、世間様も心を開き、とても友好的と思うが、如何であらうか。根っか

らの喧嘩好きなど、そういるもんじやない。

日本は個人主義よりも「和」を重んじて来た国だ。自分自身が銃や刀剣で武装して身構えていれば、相手も油断すれば、きやつにやられるぞ：とばかりに、身構えてくる。こちらが穏やかなら、相手も自ずと穏やかに応じてくれる。まずは自分が心の武装解除をする事だ。

「食べる」を「生活」と置き換えた方が、賛同をいただけるのではないかと感じるようになった。そう考えると、こちらを物を書きやすい。「外の敵」は「味方」に、世間の鬼は「友達」と置き換えれば、何も世間は苦痛ばかりではあるまい。

「1円を笑うものは1円に泣く」ともいう。生活するうえで、心が次第で、1円を大事にすれば万事に通じ、生活の基本に筋金を通る。こうなれば何も世間は、そんなにきつい事ばかりではなく、もっと友好的な、楽しい毎日となるのではないか。パラダイスは黙っていても向こうからやってくるものではなく、自ら意を決して招き寄せるものではないのか：と思うようになってきた。

毎月原稿を寄せてくださっている八郷の「さと女」様のような、友人との優雅な関係が醸し出されてくるのではないか。世間に噛みついて吼えまくっている私などより、遥かに素晴らしい生活を送っている私らしい姿が克明に目に浮かぶ。本当に、「直木賞」にでも推薦したいくらいだ。是非「風の会」の方に足を運んでくださって、色々会話を楽しまたいものと、しみじみ感じる次第である。

*

話は飛ぶが初代の茨城県知事・山岡鐵舟は、剣術師範でありながら二本差しを持っていない。いわゆる「無刀流の開祖」である。幕末、江戸を攻めて来た西郷との会見で、単身駿府に乗り込むに

あたり、武士の魂を身につけないわけにもゆかず、友人から二本差しを借りて差して行く。鐵舟が刀を持つていない理由は、貧しい人を助けるために、全てお金に換え、貧困者を救ったからと言われる。二刀流が当たり前の世の中で、無刀流を貫く魂に驚かされる。これが江戸城尊王攘夷派の幕臣山岡鐵舟の真髓である。鐵舟と西郷との会見で、江戸城無血開城は約束成立。勝海舟と西郷との会談は、すでに決まっている事に判子を押すだけ。単なるセレモニーに過ぎなかった。両者対等の肩書で調印されるものらしい。これは現在でも全く同じ事。下準備する人たちが大変なのである。

それゆえ、明治維新は、山岡と西郷とで成し遂げたとの話にもなる。西郷をして、『山岡のような金も権力もいらぬ。人民のためなら命さえ要らない。』。こういう人物でなければ人間は大きな事はできない』と言わしめた。いま時そんな侍がいますか。そこで私のような口の悪い者はすぐ、小物の集団衆議院を「衆愚院」などとなる事になる。

それゆえ、こちらの心がけしだいで、相手様も硬直するか柔和になるか決まると思う。市井の凡人と、高級幕臣とを比べても仕様が異なるが、世間様とはそういうものである。

*

長々脇道にそれたが、私はこの度、悪性リンパ腫という血液癌（再発は誤り、再燃が正しい）にかかり、現在厳しい闘病中である。悲しいかな、物がロクに食べられない。理由は、咽喉頭部の癌ゆえ、咽喉頭がんではないが、周辺のリンパ節の癌である。それが物を噛み、飲み込むときに激痛が走る。物を飲み込まない食事はありえない。つばを飲み込んで激痛。痰や液体を飲み込んで

激痛。水分不足。便秘。水分欠乏症。酔物の物、塩分の濃い物みんな激痛。この前、初回の悪性リンパ腫の時は片目喪失という激変のほか、三叉神経痛という強烈なパンチを思ったが、治まるのに約半年かかった。そこで人間の食べるという意味を考える事となった次第。

64歳での前立腺癌。79歳でのすい臓がん。81歳での悪性リンパ腫。83歳で悪性リンパ腫再燃。なんと4度目のがんの梯子である。赤堤灯の梯子なら風情もあるが、がんを4連荘（れんちやん）とはね。

歳をとるという事は、それだけ遺伝子が活性化素に触れる時間が多いという事。遺伝子のコピーミスが当然多くなる。免疫力が強ければコピーミスした細胞は異物として早々に排除されるが、免疫力が落ちたシステムではがん細胞は排除されずに生き残り、威張って再燃を起し幅を利かす。

さて食べ物と激痛の関係だが、現在の悪性リンパ腫がんは、免疫機能を司る細胞を攻撃してくる極めて悪性の病気である。普通リンパ腫はB細胞を狙い撃ちしてくるものだが、私の場合、日本では非常に珍しい（筑波大初）T細胞がやられる、超悪性のリンパ腫である。無菌室に何度入院したことやら。ありふれた細菌により、敗血症になるからだ。

さて、その臨床症状は、咽喉頭の強烈な疼痛。がん性の疼痛である。9月のお祭り以降この原稿を書いている現在12月迄3か月、転げまわって痛さに耐えている。その間世間様にはいろいろ差し入れなど本当にお世話になり、しみじみ噛み締め、世間様のご厚情に甘えさせてもらっております。超自惚れみたくて恐縮ですが、なんと私には、奥さんが9人も御座候という感じ。即ち妻の

友人たち9人が代わる代わる、なにやら私の好きそうなものを届けて下さる。特に私が好きなのは、お新香の類。大根の糍による「べったら漬け」など、頬が落ちそうである。

更に片目を失ったこともあり車の運転免許証は返納した。その為、病院通いの運転を近所の武藤さんにしていただき、本当に助かります。更に今度の抗がん剤の新薬は、1割負担でも月に3万6千円。がん保険に入ってはいるものただ事ではない。

*

チョットだけ「食べる」を科学的に触れてみたい。

「食べる」とは一体なにを意味するか？

地球及び太陽が誕生したのは、ほぼ46億年前である。そして生命が誕生したのは、ほぼ40億年前である。地球表面がかなり安定してくると、多分海の底で、生命が誕生した。宇宙から来たか、或いは地球自前でメタンガスなど有機分子が、雷などのショックを受けて生命の基礎となる有機化合物を造り、それが集まり、それに何やら皮膜を生じ、単細胞的な元祖が誕生した。恐らくそれが基となり、原始生命へと発展していく。云わば地球上全生命の元祖は動物も植物も共にこのただ1個のまとまった巨大分子が、元祖の「生命」である。しかも、新生命は自分のコピー遺伝子を持つという離れ業を身につけた。あまりにも短期間でこんな素晴らしいシステムを身につけるなど、正に神がかっている。という事は、他の惑星などですでに何億年も前に、このシステムが自然開発されておき、何らかの方法で、この地球に飛来し、定着したとする考えも、決して簡単に否定できない。しかし現在の地球上の生命は、他の惑星から

飛来した：などの考えよりも、地球自体、自らの力で新生命は誕生したと考える方が、今日かなり優性である。現在我が天の川銀河内だけでも、生命が存在しうる惑星の数は、およそ100万個存在すると考えられており、恒星との距離・質量・表面温度・水や大気存在、誕生からの年数など、生命が存在しうる惑星の数は、決して稀有なものではない。

飛躍するが、地球以上の文明を持つ宇宙人が存在しても、決して不思議ではない。さてそう考えるとき、一概に地球生命は他の惑星由来とする考えを全否定もできない。それゆえ、人類はみな兄弟、いや全生物はみな兄弟という飛躍理論も単なる空想と決めつけるのも乱暴な話である。

由来はともあれ、更に驚くべきことに全ての生命は、元を糾せばこのただ1個の塊が、ご先祖様なのである。しかも、新陳代謝と生殖機能を持ち、遺伝子でほとんど自分と同じ機能を持った仲間・子孫を増やしていく超能力。要するにクローン増殖なのである。更に多機能を持って生育すると分裂増殖し、2個の原始生命となった。2個が4個、4個が8個と増え始めると、無制限に増殖を繰り返す、地球上は命溢れる緑の楽園と化していく。しかしどんなに数が増えようと、同じ末孫の中には、仲間同士を食い物にする、それへの対策が必要になっていった。それこそ「鬼」や「敵」に変化していった者もあり、それに対する対策として免疫機能の獲得とか、多様性を求めるため、今までの雌集団だけのクローンから「雄」による「多様化」という変化が求められるようになった。

ほぼ10億年前、雄の誕生により、生物は多様性を獲得し、今までのクローンだけでは何かの伝染病など起これば、全滅するのに、95%死滅し

ても残り5%が生き残り、息を吹き返し生命は躍動し直すことができるようになった。事実、5億年前のカンブリア紀以降わずか5億年間に5回も90%前後が死滅する大事件が起きている。内容は火山の大爆発による塵芥により太陽光が不足し急激な寒冷化である。逆に急激な温暖化により生物は巨大化し、生理機能が狂ってしまった。又海水の急激な酸欠。急激な酸化、逆にアルカリ化。また大気の酸欠（現在大気の酸素濃度は21%だが、最小は12%、最大は35%の時もあり）、大量死滅に繋がった。また6500万年前には、全盛を誇っていた恐竜が全滅する小惑星衝突事件、そのおかげで哺乳類の中の霊長類誕生を迎えることができた。小惑星の衝突がなければ、我ら霊長類・特に人類誕生もなかった事になる。何がどう絡んでいるか、まったく偶然の連続である。

以上こまごまと述べたのは、単細胞同士の時代、何かの強い1個の細胞は、手っ取り早く、お隣のモタモタしている弱小の細胞があれば、それを丸事飲み込む暴挙に出てくることである。食糧が豊富なら共食いはせずとも仲間同士共栄増殖すればよいが、食糧が少なければ、手っ取り早く隣人を丸ごと呑み込めば、こんなラクチンはない。それを防ぐ為にお隣同士2つの細胞は手を結び、連携し合い、体を大きくして、難を逃れる事となった。現在地球上至る所で隣国同士くっついていたり離れたり、目まぐるしく田舎芝居をやっているが、原点は、10億年前の単細胞同士の戦いにあったともいえる。「食べる」という意味の原点はここにあったように思われる。二つの細胞がくっつきあう事から、遂に「多細胞時代」を迎える事となるのである。

こうして地球上は、単細胞が増え続け、単細胞

全盛時代は30億年も続くのである。それが今日われわれが恩恵を受けている原油なのである。石炭は、大きな樹木(多細胞)などが枯れてできた恩恵なのである。そう考えてみると、人種が違っても肌の色がどうか、宗教がどうか、誠にナンセンス極まりない。それゆえ、いつも思うのであるが自国第一主義とかなんとか、良くもあんなチツポケな考えで世界制覇を狙うなど、人類ほど愚かな生物はないとさえ言いたくなる始末である。

*

隣の細胞に食われまいとして多細胞が生まれた。多細胞になると多くのエネルギーが必要になり、益々多くの多細胞生物を食べるようになった。

生存競争に勝った人類は動物を飼育し、いつでも食糧確保の手段を確保した。しかし同じ命に甲乙差があるのはおかしいと思う。全ての命は平等であるべきである。特に西欧を中心に肉食にたいする反省すべきは反省するべきである。



地域に眠る埋もれた歴史(49) 木村 進

【石岡市内の社寺紹介】

二つの北向観音

石岡市には2つの北向(きたむき)観音堂がある。旧石岡市街地の旧富田町と旧八郷地区の仏生寺である。今回はこの2つのお堂について少しお話をさせていただきたいと思います。

○ 何故 北向観音といわれるのか？

北向観音というと長野県上田市にある北向観音が有名で、皆さんもこちらの観音堂を思い浮かべるのではないでしょう。

この上田市（別所温泉）にある北向観音に掲げられた説明板には「本尊は千手千眼観世音菩薩で北斗星が暗夜の指針となるように、この北向きの、み仏は衆生を現世利益に導く靈験があり、南向きの善光寺と相対し古来両尊を参詣しなければ片詣りになるといわれている。」と書かれています。そのため、長野市にある善光寺の参拝と合わせて両方をお参りするが良いと言われています。

一般に観音様は南向きに祀るところが多いのですが、これは観音様が見つめる方向に天竺（インド）があるためとされています。観音信仰は観音様をお参りするということで、死んだら来世で極楽浄土に導いてもらうというのが信仰の根本となっています。

その逆向きの「北向き」の観音様にお祈りするときには参拝者が南（天竺）の方を向くこととなります。その結果、今生きている現世の幸せがもたらされると考えられています。上田の北向観音と長野の善光寺とは直線距離にして30kmほど離れています。昔の人は歩いたでしょうから、1日で両方をお参りすることは出来なかつたでしょう。これもいつ頃から始まった習わしなのかわかりません。後からこのような考え方が広まったのかもしれませんが。

○ 富田北向観音 Ⅱ 常陸国総社宮の神宮寺

さて、では石岡市街にある富田北向観音の歴史を見てみましょう。平安時代頃に、日本の各神社にも仏教が浸透していったときに神社にも仏像などがまつられたのです。しかし、これを神社の建

物と分けようとする考え方が中世に起こりました。

この時に神社の地内に寺院を建て、神と仏を分けてまつるといふ時期がありました。この時に建てられた寺院を「神宮寺」といいますが、この北向観音は常陸国総社宮の地内に建てられた神宮寺だったのです。それを元禄年間（1688～1704）に現在地から北方50メートルの富田町地内に移し、その後、現在地に移築されたといえます。この現在地に移されたのが何時なのか不明ですが、天保（1830-1843年）年間の地図で見るとすでに現在地に存在していたことがわかります。現在では神宮寺そのものは形をとどめておらず、この観音堂が残るのみとなっております。十一面観世音菩薩像が安置されています。

この観音堂の向きについては何時から北向きとなったのかは不明ですが、恐らく元禄年間に総社宮より移転する際に府中のまち立てとして通りの南端に祀られ北向きとなったものと私は解釈しています。北端には現在国分寺の境内に山門だけがのこる「千手院」があり、また「隅之宮福德稲荷神社」がこの北向観音堂と向き合う形で置かれています。現在の中町通りや香丸通りの旧水戸街道は後から整備した街道でしょうから、この北向観音と隅之宮神社とを結ぶ通りが江戸初期までのメインだったのかもしれませんが。今も地域の方のお参りが続いており、地域の守護観音として大切にされ、子育ての観音様として慕われています。

富田観音（北向観音）堂の西には「府中萱」で知られる府中酒造があり、東側は大塚氏の墓所のある「平福寺」があります。

昭和4年におきた石岡の大火のときも、このお堂の手前で火は避けていったといわれ、どうにか延

焼を免れました。



江戸時代に、石岡（府中）の町中に、「香丸組」「中町組」「守木組」「馬之地組」という4つの組がありました。この馬之地というのが現在の富田町です。馬はこの府中に集まっており、色々に役立っていました。馬車組合もありました。この馬之地の名前もここに馬を扱う人びとが住んでいたことに由来すると言われています。この馬之地が富田に変わったのは江戸時代の宝永年間（1704～1710年）頃です。縁起のよさそうな名前にしたのでしょうか。もうひとつ、富田町には昔から知られる「ささら」という三匹獅子の舞が残されており、祭りには何時も先陣を切って飛んで姿を消してしまいます。

屋台は紺地にサッカーのシンボルマークでおなじみのヤタガラスが染め抜かれており、ヤタガラスが神武東征の時に大和に入る道案内をしたという神話に基づいています。

獅子は全部で三匹おり、老獅子・若獅子・女獅子

といひます。女獅子には角がありません。獅子頭は2本の角を持ち、黒漆が塗られており、目や歯は金箔で、のど部には軍鶏の羽で覆われています。屋台の上では独特な動きをします。太鼓に合わせて、黒の獅子がクルリと1回転します。(中に芯棒が入っていて、これを人が回します) 歴史的にも古く、江戸時代にもこのささらは登場してはいますが、はつきりしたことはわかっていません。「ささら」のこの三匹獅子は関東から東北にかけて多く見られ、それぞれ独特の文化があるようです。



石岡地区ではここ富田地区と三村地区や柿岡地区に同じようなものがあり、三村地区のささらは享保年間にはじまり、富田はそれより古いと言われているがはつきりしません。

また、茨城県のささらは主に「棒ささら」とよばれ、獅子に棒を刺して、その棒を回して獅子をくると回転させます。この動きは独特で、東北の「ささら舞」とは違った文化を持っています。

秋田の角館周辺に「ささら舞」が民俗芸能として数か所残っていますが、これは常陸国を統一し

た佐竹氏が秋田に移った時に伝えられたものと言われています。なお、ささらの名前の由来は手にもった竹の棒をささら(編木)といい、稲穂が擦れあう擬音を表す楽器とされ、五穀豊穡や魔よけの意味をもつものと解釈されています。

○ 小野越(仏生寺) 北向観音 小町伝説のお堂

朝日トンネル付近にある「辻」の交差点を山側に入った奥の左手にこの「北向観音堂」があります。この北向観音堂は平安時代の歌人で絶世の美女と謳われた小野小町が悪い皮膚病に罹り、ここに、霊石のいぼ神様にお祈りをした所立ち所に治ったと伝えられています。

全国に小町伝説は数多く存在しており、この山の反対側の土浦市新治地区では小野姓の家の裏手に小町の墓が残っています。また「小町の里」としてそば打ちなどを行っており土浦市の公園となっています。

この北向観音も地元の有志の手で数年前に綺麗に整備されました。小川のせせらぎや鶯のなぐのどかな里の雰囲気は私にとっても好きな場所です。

この地名は「仏生寺」と言われていますが、同名の寺はありません。柳田國男が書いた「地名の研究」には「仏生」という地名についての記述があります。これによれば、「・・・仏聖(ぶつしょう)とか仏生とか書いた字名もあるが、これなども正しくは仏餉田というべきで、即ち仏様に、日を定めて御飯を供える米の出処であったのであ

る。」とあります。そうはいってもやはりこの名前からいろいろな伝承は伝わっています。

昔は盆の17日夜の万灯が賑やかで、月に浮かれて、念仏踊りや盆踊りが盛んであったとのことですが、今は苔むした石段の上に赤いお堂があります。またその少し登った山の途中に小町の腰掛け石などが置かれています。また現在お堂の中にはちいさな聖観音菩薩像が安置されています。

この観音像は、行基菩薩が奈良から連れて来た稽主勲兄弟の作ともいわれますが、八郷町誌によれば、一説には、観音を背負った回國六部がここに来て病にかかり、その時に、長い間厄介になったある家の主人に観音のご利益を説き、お礼として残したのもいわれています。さて、この北向観音堂と対峙するかのように入郷太田地区には「善光寺」という古い寺があります。この大きな寺の本堂は屋根が重みで崩れ、倒壊寸前ですが、ここは筑波の小田氏ゆかりの寺です。小田氏は(新)善光寺を信仰したことで知られており、こちらの北向観音堂とのつながりは今の所見いだせていません。

私は、毎年桜が咲いたというところの筑波山の麓にある小町伝説の残る「北向観音」周辺の里山の桜を見たくります。

あ、今年も会えたね。ありがとう。

里山の桜は満開となり、少し風に舞ってひらひらと舞い散り、赤いお堂に降り注ぐ。

空にはトンビがゆつくりと旋回して、
ピーヒョロロと鳴っている。

ここは筑波山の不動峠への登り口
地名は仏生寺。正確には小野越。

田園が広がり直ぐに山道へと続く。
筑波山、神社寺への参拝の道でもあった。

ここの苔むしたあやうい石段を、映画「武蔵」で
お通が駆け上がった。そんな撮影場所でもあった。

我が労音史(6)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは
労音の中心活動家として参加しています。そして、
労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の
中から学んだ内容を記述していきます。

1975年の社会情勢と音楽状況

この年4月、ベトナム民族解放戦線によるサイ
ゴンの開放で、11年間も続いたアメリカ軍による
ベトナム侵略戦争は敗北により終わる。(ベトナム
戦争は1945年ホーチミンによりベトナム民主
共和国の独立宣言した時から始まっている)労音
は、アメリカによるベトナム侵略反対を音楽全体
に呼びかけ、「ベトナム人民支援の音楽会」「ベト
ナムへピアノを贈る運動」「ベトナム民族歌舞団の
招聘」など、創意を生かして支援の運動を幅広く
展開、この年も120万円の支援カンパを集め累
計700万円で、12台のピアノをベトナムに贈る
このピアノでダンタイソン(シヨパンコンク
ル優勝)が練習をした

美濃部都政が3期目に入り、大阪府や神奈川県
も革新統一による知事が誕生し、革新自治体は全

国で205都市に広がり、日本人の43%を占め
るまでに至った。この年、国鉄・電話・電報・タ
バコなど公共料金が軒並みに大幅値上げされ、一
般庶民の生活が苦しくなっていた。公労協は「ス
ト権」ストを8日間も打ち続けたが(国鉄は19
2時間運休)敗北に終わった。国鉄の累積赤字は
3兆円を超える。日本赤軍がクアラルンプールで、
米国とスエーデン大使館を占拠し、日本政府から
拘留中の過激派5人を釈放させた。天皇が米国訪
問後に記者会見で「原爆投下はやむを得なかった」
と発言し波紋を呼ぶ。ヘルシンキで欧州安保・協
力首脳会議が開催され「人権と自由尊重のヘルシ
ンキ宣言」が採択され、以後ソ連・東欧の人権闘
争が、この宣言を拠り所に拡大していく。ソ連の
サハロフ博士(反体制物理学者)にノーベル平和
賞の授与が決まったが、ソ連政府は博士の出国を
拒否する。スペインのフランコが亡くなる。

マリアカラス出演の「トスカ」が入場料3万円
で話題に、そして来日中止でカバリエの代役にな
っても入場料は変わらず大きな非難が持ち上がった。
大分県民オペラ「吉四六昇天」を東京で上演、
林光のオペラ(こんにやく座「おこんじょうり」
初演。小林研一郎がハンガリー交響楽団の指揮者
に就任。大フィルが欧州各地(20公演)で公演す
る。ユニオン演奏家協会の第一回研究会、日本
音楽舞踊会議が日本の作曲ゼミナールを、文化庁
が芸術祭で「アジア民族芸術祭」を其々開催した。
この年、シヨスタコービッチ・ジョセフィンバー
カー・南里文雄の各氏が逝去。

1975年の労音の動き

2月のサークル活動交流集会には、労音会館に
200名が集結し、活動経験や交流をして運動意

欲を高める。4月には総会が開かれ、三か年計画
の成果の上に新二か年計画の目標を設定。(会員三
万名三千サークル機関紙「月間音楽」の一千部)
この目標に向かって、三役・委員のサークル中心
に活動家を増やし、生き生きとした活動の展開を
誓い合う。目標達成のための拡大月間(10月)で
は、高橋竹山を始めとした地域例会を各地域13ヶ
所で取り組み、25000名の会員を拡大した。
“労音運動を前進させるカギはサークル活動を進
めることが重要”と改めて確認。

クラシック例会では、カンタータ「人間を返せ」
(大木正夫作曲外山雄三指揮新星日響)を会員参
加の合唱例会で取り組み、初演に勝るとも劣らな
い内容で、新聞批評にも大きく取り上げられ(被
爆30年・核廃絶・平和の願い)大きく成功。オー
ケストラ例会では、外来の買取例会も含めて、モ
スクワ放送交響楽団・レニングラード交響楽団・
ドレスデン交響楽団・NHK交響楽団・日フィル・
東フィル・新星日響や労音交響楽団まで数多くを
取り上げる。年末の第九では、日フィル(ピエロ
フロローベック指揮)と新星日響(アントン・キュ
ーネル指揮)の何れも大きく成功させ、演奏サー
クル合同例会を企画(東京労音交響楽団・東京労
音合唱団・民族音楽研究会・アコーディオン研究
会・六弦会・フォークダンス愛好会)し勝算が寄
せられた。

ポピュラー例会では、国内で57種目の例会が実
現し、音楽の多様化で複数例会が難しい中、布施
明8回、森山良子6回が企画されたのは特筆に
値する。会員からの要求が強かった歌手(五木ひ
ろし・沢田研二・井上陽水)の例会実現ができな
かったが、劇団との連携でミュージカル「山彦も
のがたり」や「清水次郎長伝」「日曜はダメよ」を

例会にて要求に応えた。海外関係では、アズナブル、ベコー、アダモ、ムスタキ等のシャンソン歌手や世界的なマルウオルドロン、レイチャールズ等のジャズ演奏家が実現した。

伝統音楽・芸能では、能・狂言から寄席芸に至るまで、それぞれの第一人者を幅広く例会として取り上げ評価が高かった。観世寿夫、宝生閑、野村万蔵、野村万之丞、林家正蔵、三遊亭円生、柳家小さん、笑福亭松鶴、高橋竹山、一龍齋貞水、ふきの会、邦楽4人の会が実現。

例会外の活動として、スキー友好祭は草津で1800名、夏の友好祭は西湖で1000名を集め、サークルや地域の交流を深め、労音の輪を広げた。

全国の労音の動き…第一回全国労音研究集会が三月に箱根で開催された。二か年計画達成に向けての交流の場として全国から650名の仲間により活動の経験交流が行われる。秋には第21回全国労音連絡会議が東京の労音会館で128団体355人の参加で開催され、「新基本任務」改定後に生じた諸問題を中心に討議された。その中で、運動の一部に「サークルを基礎とする民主的鑑賞運動の性格を曖昧にする傾向」「サークル活動を軽視する傾向」が表れており、これらの偏向を早急に克服していくことが確認された。全国共同企画は、いずみたくリサイタル・ミュージカル「俺たちは天使ではない」・沢田研二・岸洋子・菅原洋一・布施明・三輪車・チェリッシュなどで、海外招聘音楽家はカーメンキヤバレロ・レイチャールズ・メルセデスソーサ・アダモ・アトブレキが取り上げられた。この年の全国労音の会員数は20000人、機関紙「月刊労音」をより幅広い、音楽・舞踊の音楽誌にするために、新たに編集委員会を組

織し、誌名を「月刊音楽」と改めた。

1976年の私

東京労音副委員長に就任して4年目、全国や近畿労音の諸会議にも多数参加し、議事を進めたり東京の代表報告をしたり、また東京での労音活動の中心活動家として、先頭に立って活動を推進していた。ニコンの職場では会社側経営者による組合弱体政策（組合の分裂）が定着し、賃金差別や仕事の差別などにより、自由に物が言えない暗い職場に成りつつあった。そんな中で労音サークルを中心とした、「いこい」サークルは第一組合第二組合の差別がない、自由に自主的に活動ができるサークルとして、数十名の若者を集めスキーバスやサイクリング、飲み会・・・等々盛んに活動が展開された時期でもあった。

地域活動も地域例会等で出演者との創作を交えた例会作りが盛んに行われるようになった。（紙風船など）11月には、税金争議解決（入場税の滞納）のため沖縄県に元事務局跡地（信濃町）売却契約のために、返却されたばかりの沖縄に派遣された。諸活動を推進するため、横須賀からの通勤は限界に達していたので、東京に住居を探していたが、スキー友好祭で知り合った志賀高原の望山荘（本部旅館）の子息から蒲田の家を購入することが決まったのも此の頃でした。

32歳で、職場でも労音でも最大に活躍できた、最も充実した時期でした。翌年には初の外国派遣（米国に勝利したベトナム労音派遣団）にも、全国の団長として行くことが決まったのもこの年です。（つづく）

石岡市指定文化財（十二）

兼平智恵子

現在石岡市ふるさと歴史館内企画展では二月七日（木）～五月六日（月）迄、「ごじゃぺ・いがつぺ・そうだつぺ」と題しまして、茨城弁と石岡地方の方言展示、紹介しています。

説明の一部をご案内してみますと、方言は文字で書かれる事はほとんどなく、親から子へ、子から孫へと代々口伝によって継承されてきましたが、近年こうした方言を特に若い世代から耳にする事がなくなりいつしか忘れ去られてしまうのではと言う不安さえ感じ、今回の展示では、こうした方言を地域の歴史・文化としてとらえ、改めて皆さんと郷土の方言について考えて見ましようという事です。

今回は展示パネルでのアンケート調査のコーナーが設けられています。茨城の方言と石岡地方の方言がそれぞれ三十余り列記され、その方言をどのくらい知っていますか？ そして使っていますか？ 年代で色違いのシールを貼って頂きます。現在のところ七十～八十代の皆さんは使っている人が多く、五十～六十代の方々は知っている人が余り使わない。以外にも標準語化している現在、三十～四十代の方々の知っている人が入っている事でした。

私は現在の行方市の玉造出身ですのでほとんどを方言で育ち十代後半で上京、「どうしてそんなに怒っているの」「言い方がきつい」「そんなじつて何のこと？」「山登りした時ついうっかり、「おーこええ！」と言ってしまった。「えー何が怖いのか？」、その当時は早く標準語話せるようになりたい！茨城弁に対して劣等感、いえ恐怖さえ抱いていた時期がありました。

これから茨城の方言を五つほど挙げてみます。「か
つくらす」「きーだ」「きしよ」「じじやっへ」「こ
わい」如何でしょうか。意味は文末をご覧ください。

尚、主に県外の方々は方言を耳で聞いてみたいとの
希望があります。ふるさと歴史館の受付担当者
五人いますが全員、方言を話せますので、目で見
て、耳で聞いて楽しんで下さい。

本題の石岡市指定文化財の紹介に入ります。

高浜神社本殿・拝殿（附絵馬・二面）

有形（建造物）

平成一二・四・一二指定

鎮座地 高浜八六五番地

交通 JR常磐線高浜駅より0・五キロ

祭神 武甕槌尊

配祀 月読命 菅原道真公

高浜の地は常陸国に国府が置かれた時代、国府
の外港として栄えました。

国司は都から着任すると、当国内の大社に報告の
ため巡拝し奉幣祈願するのが習わしであった。

常陸国では鹿島神宮が第一大社（一の宮）であつ
たので高浜の港から船で行くのが順路であった。

当日、荒天の場合で出航不能の時は高浜の渚にス
スキ、マコモ、ヨシなどの青草で仮屋（青屋）を
つくり遙拝したと言われている。

この遙拝の式典は青屋祭りと言われ、神殿は後世
にこの遙拝所辺りに建てられたと言われている。

祭神が武甕槌尊であるのも鹿島神宮の祭神に因ん
だものであり、神殿の西向きも鹿島神宮遙拝の故
事に由来する事を物語っている。

この遙拝は後世慣例となって、毎年六月二十一

日「青屋の祭」として続けられた。常陸国の長官
の遙拝所として重要な意義があり、在庁官人及び
その後裔、氏子及び崇敬者の尊崇をあつめた。

貞享二年（一六二五）本殿再建、高浜鹿島大明

神と尊称。明治六年高浜神社と改称村社に列格。

明治十四年拝殿再建。大正元年九月、当町内天神

社及境内月読社合併。

尚創立不詳とされているが、石岡市教育委員会
発行「石岡の地名」によりますと建久年間（一一
九〇～一一九九）なりと言ひ伝えられている。

（附絵馬・二面）

一面 慶応四年 奉納

白帆を張った高瀬舟、河岸では大勢の男
達が荷の積み降ろし、たて込んだ土蔵や町並み、
当時の繁栄をうかがうことができます。

高浜の新しく出来た道路沿いにある高浜公民館
の入口の説明板で見ることが出来ます。

二面目 安政二年 奉納

三月吉日

須田政助他三名の名前が見え、絵は岩肌に咲
く花々等が描かれている、その他の絵は薄くなつ
ており分かりづらい。

東大橋香取神社の宮司 小吹様 この度の高浜神
社について貴重なお話を有難うございました。

方言答え 殴る、困った、ちくしよう

いいかげん、疲れた

○ 踊り出す はる

○ 春だがらって うすうす すんな

智恵子

墳 守（つかもり）

伊東弓子

昨年の秋、山々が紅葉し始めた頃、大好きな友
の夢を見た。暗黒の中で私を見詰めていた。
声は出さないが「具合が悪いのよ」と、眼で訴え
ているようだった。

ああ！夢でよかった。よかった。夢だった。

何度思ったことだろう。でも確かめることはしな
かった。不安が募ってはきても一歩先へ進まず、
日が経っていった。気になりながらただ思うだけ
で、犬との散歩の時に自転車で走るたびに、南の
方へ帰って行った友のことを案じるだけだった。

ある日、足を止め山崎の森の方に目をやった。森
の奥に「月の台」という所がある。府中に国府が
置かれた頃、畿内からの役人、帰る人々を乗せる
船が、高浜の小津から月の台迄行ったという。駅
舎もあつて泊まったり、馬を利用してその先へと
いった。と御留川の事で井関を歩いていた時知つ
た。今は杉木が茂った森と変り、谷津となった港
の一部は公園になり、先は水草が茂り、やがて泥
と化し渴いて地続きになってしまふ。そしてたら白
鳳・飛鳥のこの地の歴史も府中の歴史も色褪せて
しまふ。と眺めながら行つた。風を除け舟の出入
りする良い場所であつたろう。と想像を膨らませ
ていった。「月の台」という地名も、何か物語を作
りたくなるような思いを抱かせるような気がする。

この権現山に佇みながら、現実の友と遠い昔の人
が重なつて、歴史や自然が織り交わつてあれこれ
と紡いでみた。

十五歳になったカヤは、生まれて初めて府中に
行くことになった。建物の形も行き交う人々の姿
も、唯々驚くばかりだった。父は役所へ入ってい

った。カヤは不安な気持と好奇心で、馬を待つていた。朱塗りの建物、役所に出入りする役人の姿、総てが別世界だった。どれ位の時が過ぎたか、一人の女の人に声をかけられた。その人の神々しさに言葉も出ない程だった。その人はカヤの一生の師と仰ぐ存在であり、甘えて友とも呼びたい人となる出会いだった。カヤにとってその人に会ったことは奮い立たせてくれる力を貰った思いであった。何かを求めていく気持にさせてくれた。私の知らない世界があったことに目覚めさせてくれた。帰り道は府中の台から高浜の波打ち際を走った。目の前には広い流れ海が続く。向こう岸にも働く人の姿が見える。父の背で余裕ありげにあちこち眺めていた。野に小さな花が咲き、草が芽をふく。遠くの山の木々が小紫になっている。水辺の風の戦ぎにも芦が揺れ、鳥の羽音も鳴き声にも心がわくわくしていた。早く家に着けばいい。何か始めなくちゃと心は急いでいた。

カヤは府中に行く決心をした。月に一度とはいえ、四季折々の作業や暮らしがある。天候も乗り越えなければならぬ。約束の日を守り、続ける覚悟で行かねばならない。一日目役所の一室には若者が十人と、師と仰ぐあのひとの緊張した時間の始まりだ。出で立ちには自由。一人一人がそれぞれ土地、家での働き手、時間を無駄にすることなく進めるとの話から始まった。府中に行く楽しみは、生活している土地の自然や歴史にも関心がある。深まり、働く意味や生きる喜びを気づかせてくれた。父との会話も増えていく中で、流れ海周辺に沢山の墳があり、一つ一つを守るために仲間と暮らしていること、塚が出来て以来集落を造って守ってきたこと。父が月に一度府中に行くのも、援助を戴くためだった。そして兄も何年前か、遠く

畿内に勤めとして行ったこと、先祖の住むこの地へ畿内の人を連れて戻ってくるのと、少しずつ分かってきた。父を取り巻く一族が墳を守る使命をもっているのだ。そして田を造り、畑を耕し狩りをして流れ海での漁をしての生活だった。決して豊かとはいえないが祭りや儀式・同じ一族との交流も心に豊かさを育ててくれた。畿内への旅、府中の様子など、みんなで共有し合って世界を広め合う語りの場はある毎にもたれた。

師と仰ぐあの人は、役所のひとと一緒に府中の町での生活が始まったが、月一度の集いは欠かすことなく続いた。特に歴史を大切に考えて学び、その場へ足を運び、土地のひとの話しも記録していく姿勢を確り身につけていくって欲しい。そして次の人たちに伝えていくことが重要なことだと、そこに次の時代が築かれていくのだと、力を入れてはなしてくださった。そういう中で十人の若者には、それぞれの地域で勉強し合う集いをもつよう宿題が出されていった。今迄の月一度の府中での集いは各地域の報告会となり、それに対して指導をしてくださる形となった。カヤも今まで以上に地域での語り合い、実践に力が入った。カヤは埋もれてしまいうような地域の物・出来事を拾い集めることから始まった。

カヤも村の人の所に嫁ぎ、子供を育て始めた。府中迄の道程はとも難しくなった。師と仰ぐその人は、「遠く迄来なくても、自分の囲りで出来る事、一緒に生活している人、作業する人、子供を育てている人となさい」と、新たな方法を教えてくださった。偶にはカヤの所迄も来てくださった。カヤたちも府中迄行ったり、或る時はお互いに高浜の海で会って、日がな一日を子供を遊ばせ、語り合い、夕食の足しに菜を摘んで別れた日もあつ

た。

師と仰ぐその人は、遠い畿内の一族の元に帰ることになった。「元気な中に帰らねば」と、ご主人と一人の娘さんを連れて某月某日に発つとの知らせを聞いた。カヤは高浜の小津から船で発つ師を見送るため、夫と馬で向かった。美しい朱塗、緑の船は静かに浜辺を離れた。十人の若者も中年となり、家族と共に手を振っていた。カヤは顔を拭いながら、水辺の道を走り、高浜の墳の下迄行った。今迄も美しい船が流れ海を上り、下つていくように、こんな思いで見るとは初めてだった。「皆さんの生活している所の歴史を確り学んで、伝えてね。今生きている者の宿題・課題よ」と、年を重ねてきても、言われた凜とした口調も、気品も変らなかつた。若葉に溶け込むように衣が初夏の風に揺られて森の奥・月の台へ入っていった。東国まで来られて役目を果たされて帰って行かれる畿内には多くの人が待ち侘びておられることだろう。カヤは森の奥の月の台という所を知らなかつたが、あれや、これやと想像し、広い世界迄は知ること無く過ごしていた。でも畿内への道筋を僅かな情報を基に描いていた。それと、「宿題」といわれたことは、人生の課題として続けていった。白髪も薄くなり、体も変りゆく姿も受け入れて信念を燃やし続けていた。疲れてくると、こちらの墳から対岸の森の奥、月の台を眺めては、去つていった師の面影を新たに心に焼き付けていた。その後、この東国にも次の時代の風が吹き、墳守をする人の数が減り、管理が思うに任せず、荒れていったようだ。又、戦いごとが増えて、男達が兵隊に駆り出されていき、人口も減つて村としての纏まりもなくなつていったという話だったが、「俺はどこさまも行かねえ」と頑張るカヤの姿を見た、人に

聞いた。遠い遠い古のお話。

★・★・★・★・★・★・★・★・★・★

千年以上も経った今の時代に生きている私たち、墳をどう見、どう扱っているのだろうか。墳守をしていた人々はどうか。絶えてしまったのか。祖母は土浦から、母方の祖母は飛騨高山から、祖父は水戸からとその先を辿ったら、どうだろうか。人は一定の所にいるとは思えない。山を越え、海を渡り、台地を踏んで来た先祖があるために、今ここにいる私だと思ふ。現代人も船で、飛行機であちこちの国へ行っている。その現代人は何を守ろうとしているのだろうか。壊すことの多い現代人、何を守るのか考えていかねば…と思ふ。仕事を退職した後、権現山古墳に思い入れの強い夫と、雑草刈りをした。朝露を踏んで気持ち良かった。二人で墳守をした気分だった。



御岩山神社

小林幸枝

私の同級生からお勧めの御岩山神社に出かけました。ここは茨城県日立市にある日本最強、パワースポットです。

創建の時期は不明ですが、縄文晩期の祭祀遺跡(さいしいせき)の発掘や日本最古の書のひとつ「常陸國風土記」(七二二年)に「浄らかな山かびれの高峰(御岩山の古称)に天ノ神鎮まる」と

書かれていることから、古代より信仰の聖地であったことがうかがえます。

中世には山岳信仰とともに神仏混淆の霊場となり、江戸時代になると水戸藩初代徳川頼房公より出羽三山を勧請(かんじょう)し水戸藩の国峰と位置づけられ、代々の藩主が参拝するのが常例とされました。

明治維新によって神仏分離が実行され、神社として純粋な形を保つため、大日堂、観音堂、念仏堂、大仁王門などが取払われましたが、墳内の遺跡、祭りの内容などは今日でも他の神社と違った昔の名残を伝えていきます。

御岩山神社は一つの神社に沢山の神が祀られています。

- ・ 国常立尊(クニトコタチノミコト)
 - ・ 大国主命(オオクニヌシノミコト)
 - ・ 天照大神(アマテラスオオミカミ)
 - ・ 邇邇芸命(ニニギノミコト)
 - ・ 立速日男命(タチハヤヒロノミコト)
 - ・ 天御中主神(アメミナカヌシノカミ)
 - ・ 高皇産霊神(タカムスビノカミ)
 - ・ 神皇産霊神(タカムスビノカミ) などをはじめ、御祭神の数は一八八柱あります。
- 数を聞いただけで、圧倒されました。強大なパワーを持つ御神木「三本杉」は県指定天然記念物です。

幹周囲九メートル、高さ五メートル推定樹齢六百年、幹が地上三メートルより三本に分れ均等に天をつく巨樹でした。

御岩山は標高五三〇M。御岩山に登りに行く前に、歩きやすい靴を履き、杖を持参すれば登りやすくなります。午後三時以後は入山禁止と書かれていますので、ご注意ください。

私は運動不足の為、この険しい道は相当キツかったです。山頂まで片道で約四〇〇五〇分程度、マイペースで登ったので一時間位かかりました。

山頂に到着、山頂からはすばらしい景色が見られて気持ち良かった!! 景色を満喫した後、裏山道から下山しました。

登山は大変だったけど達成した満足感はとても気持ち良かったです。

太陽の光がすごく強く眩しかった。沢山の神にお参りをして、パワーを貰えたような気がしました。ご利益がたくさんあることを楽しみに期待します。

父のこと(8)

菊地孝夫

この辺で母のことにも触れてみようと思う。大正13年(1924年)10月 東京に生まれる。宮島龍夫・マサ夫妻の3女として5人姉弟の真ん中に生まれる。

母は小さい時から読書好きであったらしい。読書に集中しているときは、何か用事を言いつけても聞こえないので往生した、とすぐ上の伯母・ヒロが言っていた。旧制の東京府立・第五高女に通った。(現在は男女共学の白鷗高校と名を変えている。)水泳部に所属して年中真つ黒に日焼けしていた。かなりの有力選手であったらしいが、もし1940年の幻に終わったオリンピックがあったなら候補になったかもしれない。またすぐ上の伯母と母は専攻科か専門学校へ進んだようだ。そこで幼稚園教諭の資格を取ったらしい。のちに父が失職した時、この資格を生かして幼稚園に勤めた。ずっと後の昭和33年ごろ、遊びに行った私と

兄を祖父は銀座の寿司屋に連れていってくれた。祖父は御馳走したつもりだろうが、残念なことにカウンターに座った幼い私は卵焼きばかりを食べた記憶しか残っていない。せつかくの機会なのに残念なことである。いまとなつてはこんな高級店で食べる機会など永久に失われた。

兄・康夫は「光り物」のコハダを食べ、帰宅後蕁麻疹を発症した。食中毒であった。これがトラウマとなり、すっかり懲りて以後兄は「光り物」を食べなくなつたし青魚にアレルギーを覚えてしまったようだ。

私の家では食事中発言すると「口の中にもものを入れてしゃべるな!」と、たちまち雷が落ちた。

食事の作法は、父より母のほうがきつかつた気がする。姿勢が悪く食事していると、食べたものがまっすぐに胃袋に落ちて行かないとこれまた叱られた。母たちは祖母から背中に物差しを差し込まれたのだという。自分もやりかねない母だった。一本箸も駄目だし、ご飯に箸を立てては駄目だし(仏に供えるので縁起が悪い、とこれは祖母から)。箸同士の食べ物の受け渡しもダメ。箸の先をなめるのも駄目。(卑しい行為だというのだ。)猫のように皿をなめるのもダメ。あれこれおかずの上をさまようのも、迷い箸と言って御法度になつていた。箸の握り方はもつとも厳しく注意された。

父と祖母、母は木製の箸箱を持っていた。茶碗の持ち方も注意された。指は中に入れてはいけない。食卓にかがみこんだ姿勢も、犬食いと言ってこれまた手厳しく排斥された。

茶碗とお椀は常に左手に持ち、間違つても食卓の上に置いたまま食べてはならなかった。

消化を助けるため、よく噛んで食べる、ろくすっぽ噛まずに飲み込んではいけない。イモやトウ

モロコシ以外は手づかみで食べてはいけない。秋刀魚の頭としっぽをもって食べてもいけない。こうして食べたほうがうまそうだったのだけれど。秋刀魚は内臓まで、我々兄弟は目玉まで食べた。食べ物の好き嫌いもなくすようたびたび言われたが、これだけは治らなかつた。

時に箸をおいて父と母との会話がなされる。これに口を挟もうものなら、「子供が大人の会話に口をはさむな!」と、これまた雷が落ちる。

大小の雷をいちばん食らつたのはもちろん私である。時に折角の食事がまずくなる、と兄に睨まれたこともある。

ご飯、おかずは残してはいけない、いったん手を付いたら最後まで食べよ、ともいわれた。

腹が痛いなどというと、口が曲がるほど苦い千振の汁(唐薬といつていた)を、茶わん1杯飲まされた。千振はキノコ採りに行ったとき撮つてきて、軒につるし乾燥させ、薬箱にいつも常備して

いた。それでも治らなければ、まる1日絶食である。では菊地家の食卓は暗く沈んだものかというところでもかつた。「あれは何、これはどういう意味」とうるさく問いかける子倅を煩わしく思つたのだろう。東京に生まれ、かなり自由な環境に育つた母にとつてはこの石岡というところは暮らしていくかつかつた処かもしれない。夏休みなどで羽鳥に遊びに来た折には、田舎の風習を珍しがって結構楽しんでいたらしいし、祖母・まさの育つた茨城に幾度か遊びに来て田舎暮らしを体験して面白がついていた形跡もある。

お向かいの倉田家の娘さんが高校生時代のこと。駅から出てくると、後ろから息を弾ませ追つてきた母が、「*ちゃん、あたしと靴を交換しよう」と言うなり、その場で履いていた靴を脱ぎ、あつ

けにとられている女子高生の通学靴とはき替えさつさと立ち去つたという。

母の中では別に当たり前のことだったようだ。よくいえば大正生まれのハイカラさん。妙に古臭いのはだめだったらしい。日々の生活の中でも新しい感覚が言葉の端々にあつた。都会的な考え方というか、姑とうまくゆかないのも当たり前だったのかもしれない。

父の横浜高商の同級生が出征するとき、知り合いであつた母たちが横浜港まで見送りに行った。すでに海軍将校であつた父も、たまたま横須賀の海軍鎮守府に来ていたので見送りに行った。そのとき出会つていたはずだと思ひ出を語つていたがお互い記憶にはなかつたらしい。

この方は遂に帰らなかつた。



【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らして(26)

やん女

弥生月に入ったのに、暖かだったり、寒かだったり、どうなるのかな……

◆我が家にて……

・今日も冷たい雨、こんな日は家の中で出来ることをするしかない。やることは色々あるが、順番

を決めて、まず、友人から頼まれた着物のほどこきを、布の感触は大好きなので、ラジオを聴きながらの作業。先日反物になった布地をもつていくと、木で作ったポディーに小さく作り替えた着物が着せられていた。帯もしつかり結ばれている、創るのは楽しいよ、やってみたらと言われたが、とんでもない。今はこれ以上趣味には目をつぶることにしているの・・・

・週一で届く産直野菜と生協のおかげで、ほとんど買い物に行かない。不足のものがあるときはスーパーに寄ったりするが、ほんの10分程度で済ませている。新聞折込の広告などは目を通したことがない。買い物自体あまり好きではないし、照明とかチラチラする中にいると、具合が悪くなる。毎週届けてくれる地元の有機栽培農家さんに感謝です・・・

・311(東日本大震災)からもう8年、あの時の恐怖が思い出される。瓦屋根が落ちビニールシートが張られた家がたくさんあった。余震で大きく揺れたとき、慌てて窓を開けようとして転び、母は大腿骨折した。福島に住む友人とは連絡が取れず長い間消息不明だったが、幸い長野のほうに避難していて無事。その友人が、ちつとも復興が進まず、悔しいと嘆いていた。その悔しさを表すように今日は未明から大雨、午後からはものすごい突風、荒れた1日・・・

・2年前に分けて貰った山野草の金龍花、中々芽が出ずあきらめていたら、雨の後一気に葉が出て、それもたくさん増えて花が咲いた。その花は日中花が開き3時ごろは閉じていた。

・荒れまくった天気もおさまり、今朝は穏やかな快晴。花もいろいろ咲き始め、楽しめる季節になってきた。しかし、同時に草たちも勢いがよく、

草との戦いが始まる。コロちゃんも冬をどうにか乗り越え、日光浴・・・やはり外は気持ちがいいようです。青空にフワフワの真つ白い雲、ゆっくりに、ゆっくりに流れていく。

◆庭と畑にて・・・

・市内に住む仲間から植木を頂いた。端正に植えられた庭木、珍しい物が好きで集めたが込み合ってきたので持つて行かないかと連絡がありさっそく取りに行った。10本程の庭木を掘り起こし、我が家の庭に植え替えた。うまく根付いてくれるといいですが、花が咲くのが楽しみ・・・

・月の輪という名の椿、大きくて綺麗な赤と白・・・庭がにぎやかになってきた、沢山増えたクリスマスローズも水仙も、ムスカリもボケも、今日はムラサキハナナ(花大根)も咲き始めた。ムラサキハナナはこぼれ種でいくらでも増えて一面紫色になる。桜のたよりもちらほら、この辺りはまだまだ硬い蕾・・・

・畑の手入れをしていると、どんどん日差しが強くなり、背中が焼けるように熱くなった。今日はシャツ一枚でもいいようなお天気。コロも朝から外に出してあげた。ところが度々人を呼ぶ。ちょうど抱き癖のついた赤ちゃんのように。その度にちよつと散歩し気分転換を図るのだが・・・散歩中はなぜか機嫌がいい。だが昨日も散歩中ひっくり返った。今日は夫と散歩中倒れた。おーい、コロが倒れた、と、呼ぶ声で慌てて畑から走っていくと、抱えて戻って来る所だった。10キロは思いもんだなあ・・・

・畑にポツンと不明な樹木が、2年位前から気になってたが抜くのも面倒で放置。処分しようとシヤベルをもつていくとピンクの花が咲いて、蕾も

たくさんついている。どうも桜？っぽい。処分するには勿体ないので裏庭に植え替えた。うまく根づいてくれるといいのだが・・・

◆お出かけ・・・

・暫くぶりにマスター夫妻と話をしたくなり、夕食はお蕎麦屋さんへ、香りのいい蒔の薑があるよと言うので、早速天麩羅蕎麦を注文する。なるほど、同じ路の薑でも一口噛んだ瞬間の香りが強く、美味しかった。お蕎麦もちろん美味しく話も楽しかった・・・

・河津桜を見にフラワーパークに行った、急な坂道を500メートル程登っていくと頂上付近に一面の河津桜が咲いた(250本との案内があった)桜はちよつと見ごろであちこちカメラを手にした人が楽しんでいた。ここからの筑波山も見事で、帰り道は別ルートを歩くと、満開の椿やまんさく花、白梅、紅梅など眺めながらハイキング気分を味わった。

・恒例のカフェコンサート。今回も地元のおカリナサークル「ポコアポコ」さん、浜辺の歌や、瀬戸の花嫁、リクエストしておいた坊がつる讃歌など10曲ほどの演奏、ギターの演奏もあり楽しませていただきました。演奏後に、みんなでいただくランチ、お喋りしながらの時間がまた楽しい、あつという間に時間は過ぎて、またの再会を楽しみに・・・

・思えば長い付き合いのエコクラブ仲間。相談があり自宅を訪ねると新作作品つたけどというこつとで工房へ、彼女はステンドグラスもやるので工房がある。11時前だったのでちよつとアドバイスを、と思ったがとんでもない、いったん昼食を済ませに帰り再度伺った。結局4時まで、途中旦那

様がコーヒーやおやつを用意してくれた。忙しい方なのにほぼ一日付き合ってもらって申し訳なかった。教えてもらったものみんなに教えなければ・・・

・ワイワイかご作り、回を重ねるごとに要領がわかりスムーズに、最高齢89歳のちーちゃんも熱心上手に出来るようになったら娘さんにプレゼントするのだと張り切っている。こうして集まれる場所を提供してくれるオリブさん、今日もお世話様でした・・・

◆もろもろ・・・

・この時期はあちこちから味噌の話題が、今日は久しぶりの暖かいお天気でお味噌の仕込みをするには最適の日でした。いつもお世話になっておるご夫妻の家に入ると大豆のいい匂いが漂っており、麹と塩はすでに混ぜてあったので柔らかくなった大豆をつぶし、お団子にして容器に投げ入れる。

“美味しくなあれ”と祈りながら・・・八郷に来てからの恒例の行事、無事に終わりました。

・先日味噌づくりの時市内のカフェにおいしいパンのメニューがあるよ。どうもパンは八郷の方の人が作っているらしい、と、話が盛り上がった。そこで昨日急に角谷さんのパンが食べたくなり

工房を訪ねてみた。農家の蔵の中でパン（イタリアパン）を焼いており、予約で販売している。あいにく焼き上がりにはしばらく時間がかかるというのであきらめた。市内のカフェにパンを卸しているのはやはり彼だった。住まいの古民家の方に6月ごろからカフェを始める予定だと話していた。後ろに山を背負い、田んぼと畑の細道を走ってたどり着く古民家のカフェ、楽しみですね。

・シイタケの原木にコナラの木をいただいてきた。

もう一か月前にシイタケ用に切つてあるからと言われていた。しかし、中々取りに行けなかった。夫に頼んでも今日はだめだな、明日も無理だな、というわけでしびれを切らして自分で取りに行つた。やつと軽自動車に積んで持ち帰り、せつかくの好意を無駄にしないで済んだ。あとは穴をあける作業だが、これはいつになる事やら・・・

《風の吹き》

贅沢旅行

打田昇三

三十年ほど前なので現在は大きく変わっているかとも思うが、十二日間の旅行中に其の国では定番の料理らしいが私は食べない「鶏・羊・牛」の肉料理攻めにあつて苦しんだことがある。贅沢・我儘と言われると弁解の余地は無いが、次の様な全く個人的な理由？で食べられないのである。

先ず鶏は、少年時代の終戦直後に或る会社の社長宅に住み込みで働いていたが、其処に数羽の鶏が居て世話をする私になつき肩にとまるようになった。或る日その鶏を来客接待用食材にするように命じられて涙ながらに殺害した。羊は自分の干支であり、牛は自分の星座（牡牛座）であるから、その法則？で選別すると私が食べられる肉類は豚しかないが中近東辺りでは、あまり豚肉を食べべないらしく冒頭に述べたようなメニューになる。

尤も此の時はイラクとの戦争終結直後のイランに日本では最初（私以外は主に旅行業者）、世界でもモノ好きなフランス人に次いで二番目に行つた際のことなので、現地のホテルでも其の辺に居た鶏や羊を適当に調理して出したのかも知れない。

イランはイスラム国家ではあるが「シーア派」

と言う独特の宗派の聖地であり、また古代宗教の「ゾロアスター教（拝火教）」が現存する国であるから他の諸国とは違う食文化等が有つたらしい。先ず成田空港でイラン航空に搭乗する際、女性はスカーフや風呂敷で頭髪を隠すように言われた。機内では女性乗務員が喪服の様な黒づくめの服装で厳かに迎えてくれた。搭乗機は經由地の北京空港で真冬なのに完全冷房のロビーに二時間放置されたが、是は中国独自のサービスであつたろう。

当時の航空機はスピードが控え目で北京からイランの首都テヘランまで悠々と八時間飛び深夜二時に無事到着、明け方に山麓のホテルに入った。

テヘランとはペルシア語で「暑い所」というらしいが其れでも冬は寒い。数時間仮眠してから予定通りイラン国内二千キロを十日ほど掛けて回るバスの旅が始まった。別に珍しくは無いけれども此のバスと言うのが日本では廃車にする様な中古車で最初から乗降扉が不具合、出入りは窓から「ドライバ―は自信たつぷりに」「是は日本車だから安全！」と言つてくれたが逆に乗客は不安になる。

走り出しは順調であつたが、出発に手間取つた時間を回復する為にドライバ―は街道を逸れて半砂漠地帯の近道を進んで行つた。是が裏目に出て中古バスの古タイヤがパンクでは無く破裂した。運良くと言うべきかオアシス地帯に小さな集落が有り、其処の修理屋でタイヤ交換が行われたが、中古自動車主体の輸送手段ではパンクなどが日常茶飯事で発生していたらしく手際が良い。然し目的地は未だ数百キロも先である。

その目的地はイラクとの国境に近い山中の都市であるが夕刻前に着く予定が、大分、遅れて日没後になった。然も目的のホテルが見つからない。

添乗員やドライバ―、現地ガイドが必死で探した

結果、一軒の八百屋を見つけた。何と其処がホテルの入口であった。八百屋であるから当然だが、ホテルと言っても風呂無し、タオル、トイレットペーパー無し、シーツは汚れていて、是では碌な食事も出ないかと諦めていたところ、山盛のイン米に羊肉を被せて、そこに生卵を落とした豪華？な料理が出た。是が最大のサービスらしい。見ただけで食欲を無くしたが、他に食べ物は無いから決死の覚悟で少しだけ頂いた記憶がある。

鯉の頭

打田昇三

「目には青葉山時鳥(ほととぎす) 初鯉」という山口素堂(芭蕉の弟子)の句がある。江戸時代には初鯉を將軍に献上したのだが、献上品は別として幕府が市場から買い上げる鯉の価格は物価の変動に関わりなく「一尾が錢一貫五百」と決められていたという。鯉が市中に出回る頃の相場は一尾が百文ぐらいなので魚河岸としては結構な値段になるが、実際には幕府の役人が「検査」と称して一尾一尾の首を切り、契約数の五倍ぐらいを持って行ったので市価と変りはなかったらしい。

私は現役時代に全国で使用する武器関連調達品を検査検収する部署の事務を長く担当していて業者「不合格」などを通知していたから、鯉とは無縁ながら恨まれたと思う。民主主義の時代とは言っても組織社会は階級制度なので上級者は威張り易いが、ともすれば退職後も現役当時の意識が改まらないOB(大馬鹿の略?)が居て、再就職で業者となつてからも「課長は居るか！」などと横柄な態度で接して来る。私は足軽階層ながら態度の大きい連中を全く無視していたので、評判は悪かったが悪評も定着してしまえば強みになる。

或る時に関連部署窓口で仕事の連絡をしていて背中をポンと叩かれた。振り返るとトップの將軍が廊下に居て「親分、またやったらしいな！」と言われた。敵(OB)が告げ口をしたのである。其の將軍は、私の上司であった方の親友なので其れだけで済んだのだが：階級社会では「上官に絶対服従」が原則ではあるが、私は「仕事上の立場に上下は無い」と勝手に決めて、言うべきことは言っていた。江戸時代だと、魚河岸の鯉のように簡単に首を切られていたかも知れないが：

許すな「知財窃盗」

菅原茂美

過日、和牛の遺伝子が、あわや中国へ流れ出そうになった報道がなされた。何十年、何百年と苦労して出来上がった「産業用動植物の遺伝子」という知的財産が、マンマとある集団により、盗み取られる現実報道を聞いて、腸(はらわた)が煮えくり返る。遺伝子の改変等、生易しいことではない。下手をすれば、リスクの大きくなる可能性のある遺伝子集団を、良いところだけに目をつけ、何十年もかかって遺伝子固定を実現し、安定的に遺伝するよう技術固定することの難しさ。

実際にはブドウの「巨砲」は大井上康により、1955年商標登録されたが、それまでにヨーロッパのヴィニフェラ(形質遺伝4分の3メス)と、アメリカのラブルスカ(同4分の1オス)の交配により、ほぼ40年かかって出来上がり、登録後もほぼ20年かかって、一般消費されるようになった。この苦勞を一瞬にして盗み取られる無念さは想像を絶する。幻のブドウ「シャイン・マスカット」もできたと思つたらもう中国で販売されているという。

鉄道の新幹線は中国で開発したものだ!! コシヒカリも同じこと。これでは世界のルールはどうなっている事やら。自動車や、色々な機械も同じ事。アメリカは中国による知財窃盗は、350億ドルと怒っている。窃盗事件ではないが、知的財産の開発は、日本の否、茨城県が命懸けで開発した豚のローズ・ポーク。最終的にデンマークのランドレース(メス)×イギリスの大ヨークシャー(オス)のF1(メス)×アメリカのデユロック(オス)×ローズポークとして、1978年商標登録。いかに大変な事かは関係した者でないとは分らない。その後生産の頭数が間に合わず「常陸の輝き」として販売している。」

そんなわけでこの度大阪の60歳代の男が、知らなかった…を押し通して和牛の受精卵と精液を中国へ持ち出す寸前に逮捕された。ところが日本には精液や受精卵の海外持ち出し禁止は法律になかったという。しかし家畜伝染病予防法がそれを禁じていたために逮捕に至ったという事だ。和牛についてはその肉の美味しさは格段に抜きんでいて、受精卵や精液を密輸して徐々に改良を進めれば一つの国が日本の和牛に置き換えるのはそんなに難しいことではあるまい。セクシオンを超えて守るべき法は関連づけて守っていかないと、とんでもない落とし穴に落ち込んでしまう。法整備も、もっと厳しく関連性を見極め、国を護る態度が重要である。

愚かなるエッセイスト

菅原茂美

それは私の事である。随分勉強したつもりでも、どこかに抜け穴がある。例えば癌の発生について「再発」と「再燃」で大きな違いが有ることを、

内科医の娘から指摘された。再発は前の病気が完全に治り、再び同病が発生した場合をいう。再燃は前の病気が治りきらないうちに同病が再び起きた場合をいう。これを私は、片目失明した16年の悪性リンパ種という血液癌が、再び姿を変えて18年扁桃痛が現れたと勘違いし、繰り返し再発と書いてきた。用心して書いたつもりでもどこかに抜け穴があるものだ。だから専門外の事は調子込んで書くものではないと思ったが、それではあまりにも狭くなり、何も書くことがなくなる。誤りは訂正してお詫びする。

それからエッセイを書いた内容だが、調子込んで国会でのめめ事や、国が造った巨大な借金などに対し攻撃的な文章を連発したが、昔なら特攻警察にしょつ引かれるところを、今の世の平穩さに感謝する次第である。

それから対中韓などのゆすり・たかり的外交に對する失望感等、いい気になって書きまくったが、国民感情はわかるが、真実の明快でないものは、やはり素人が書くべきことではないかもしれない。…と反省している。

さて、もし私がいま米国にいて、キリスト教原理主義を攻撃する、これまでのような随筆を書き続けていたとしたら、もうとっくにこの世には、おれなかつたであろう。

人は信じ込んだら、誰が何と言おうが聞く耳持たぬであろう。地動説？ そんなもの誰が決めた？ 現実として太陽が地球の周りを廻っているではないか。人はサルから進化した？ バカも休み休み言え！ こんな調子の集団に住む米国に對しなせノーベル賞が、あんなにたくさん貰えるのか不思議でならない。

私は実際に中米のある国で、米国人キリスト教

原理主義者（500人ぐらい）の10km四方ぐらいの隔離された生活を見てきた。スペイン語の国で英語を話している。独立国の中にもう一つ独立国があるみたい。村はバリケードで囲われ、発電所・TV局・ライブ劇場・学校・教会・魚類養殖池・牧場・畑・農機具工場・武器工場何でも揃っている。完璧な原理主義で我々自由主義国の人から見たら想像もできない暮らしぶりである。自給自足体制で、生活資金は芸術作品販売と、芸能活動収入・それにどこからか莫大な資金が援助されていると思われる。周囲と何のトラブルもなく暮らしているらしい。年に一度彼らのお祭りの日に、村は一般人が立ち入ることができない。それぞれに生活があるのだから、原理主義批判なども実は余計なお節介なのかもしれない。

さて実際、米国の生物学の先生が進化論を授業すると早速殺されている。銃規制など論外。コンビニの数より銃販売店の数の方がはるかに多いという。日本の銃規制状況が羨ましくてならないらしい。そんな訳で、私みたいに、知ったかぶりして、近代科学を根拠に、いい気になって進化論など唱えていたら、命がいくつあっても足りない。原理主義者の厳しさはISを見るまでもなく、それはそれは想像を絶するものがあるようだ。

さてわが国で、がん治療に当たり、近代医学を無視した何やら信仰めいた、それを信じている人々には真に良い結果が見聞されるが、それはそれで実際よくなる人もいるというから良いであろう。私の場合娘夫婦、孫夫婦ともに医師のファミリーなので、簡単には信じられないけれど、実際よくなる人もいるというのであれば、それはそれでよかろうと思う。近代医学とてなんでも即解決などありはしない。多分私とて、4度のがんを患

い、心の中にどこか、何かに紐（すが）りつきたい気持ちも多分にある。一応近代医学に一切を任せているが、何かを求める気持ちはどこかに存在する。なんで俺が4度も癌にやられなければならぬのか？ 天を恨む気持ちと、俺が、一体何を悪い事した罰というのか？ そんなこと誰にぶつけようもないし、心がひねられてくる。通常かなり割り切ったサイエンティストめいた言行を行っているが、心の中は、混乱限りない、か弱い只の愚か者である。しかし、色々考え、遠慮ばかりしている、何も書けなくなる。多少は凶々しく、思い切って何かを書かなければ、エッセイストの端くれにもならない。

【特別企画】

打田升三の平家物語

巻第十一（一・一）

- ・ 首渡のこと
- ・ 内裏女房のこと
- ・ 八島院宣のこと
- ・ 請文のこと
- ・ 戒文のこと
- ・ 海道下のこと

最初に書く部分の標題が穏やかでは無い。現代は勤務先の評価が悪かったり、不祥事を起こしたりすると「クビ」になることが有り、真面目に勤務していても不況で職場を追われる場合もあるが命を取られることは無い。企業としての平家は既に倒産しているから「クビ」も仕方がないけれども此の場合は

源氏が一の谷合戦で捕獲？した平家軍戦死者の首であるから、残酷な話になるので念仏でも唱えておきたいところである。

巻第九で述べたように都への帰還を目指して神戸地区に布陣した平家軍は源義経及び源範頼が率いた東国武士団に完敗し多くの戦死者を出した。一説によれば、此の時に後白河法皇から「源氏との和平を考えているから…」と、平家側に休戦が示唆されていたらしいのだが、騙(だま)されたにしても苦情の言える相手では無い。気の毒ではあるけれども泣き寝入りして貰うしかない。

平家物語も巻第十に入ると閉家物語と書いたほうが良いように平家方諸人物の不幸な話が続く。一の谷合戦で討死した平家の重役級幹部職員だけでも順序不同に並べれば清盛の六男・経俊、七男・清房、八男・盛俊、九男・雅俊、十男・清定、平重盛の五男・師盛、清盛の甥の平経正、通盛、業盛、さらに平清盛の末弟・忠度、そして熊谷直実に討たれた敦盛(清盛の甥)や常陸武士に討たれた知章(清盛の孫)など、中小企業であれば会社が潰れるほど主要な人材が消えてしまった。

そうした中で、側近の家臣に裏切られ一の谷で切腹しようとしたところを源氏方の武士・庄の四郎に止められて投降した平重衡(知盛の弟・清盛の五男)は、後白河法皇の思惑から平家と源氏の仲介役として「神器奉還(法皇の希望)」と「平家存続(平家の希望)」の為に虚しい努力をさせられるのである。しかし重衡は巻第五「奈良炎上」を指揮した人物であるから宗教法人？の圧力が強くとも助かる見込みが無い。源頼朝は法皇に申し入れて重衡を鎌倉に呼び、その人物に敬意を抱いたと言うが、仏の威光を掲げる僧兵の要求で斬られた上に奈良の般若寺で首が展示品？にされた。

平家は神器を抱えた賊として源氏に滅ぼされることになり京都では証拠物件を持たない天皇が即位する。そうになると、後年に楠木正成が言ったように「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権(力)に勝たず…」後は神仏頼みしかない。

首渡(くびわたし)のこと

「寿永三年二月七日、摂津国一の谷にて討たれし平氏の頸共(くびども)、十二日都に入る…」と原文の冒頭に書いてある。戦さに負けると遺体の扱ひも粗末になるが、源平盛衰記に依れば二千余人が首を斬られて、其のうちの十人分だけが京都に連れて行かれた？らしい。いずれにしても気の毒な話である。

京都に潜んでいた平家所縁の者たちは、いつ自分の身の回りにも追及の手が及ぶかも知れないので、生きた心地がしなかった。

平重盛の嫡男・小松三位中将維盛の北の方は右京区嵯峨の大覚寺に隠れていたのだが、特に心細く悲しく不安を募らせていたところに「此の度、一の谷では平家一門の人々が残らず討たれて、三位中将という肩書の公家が一人だけ捕らえられた…」と聞かされたので「それは維盛殿で有ろう…」と思ひ込み、悲しみの余り床に伏してしまった。

ある女房が訪ねて来て「捕らえられた三位中将殿とは維盛卿のことではありません。本三位中将平重衡殿のことです…」と申し上げた。これで北の方が安心すると思つたのだが、北の方は「…そうすると夫の維盛殿は、斬られた首共の中にあるのか!」と、一層の不安に駆られてしまった。平家の都落ちに際して維盛と北の方との別離の悲しみを描いた章段が巻第七「維盛都落」にある。

二月十三日、現在の検事に当る大夫判官(五位の位

階を持つ檢非違使)卜部(うらべ)仲頼が六条河原に出向いて首を受け取った。それを西洞院大路から北に移動して、監獄の門にある梅檀(せんだん=おうち)の木に掛ける(罪人として見せしめにする)ように源義経と源範頼が要求した。

是を聞いた後白河法皇は、さすがに疑問に思い「それはどうかな？」と太政大臣(藤原基通)、左大臣(藤原経宗)、右大臣(藤原兼孝)、内大臣(藤原実定)、さらに大納言(藤原忠親)の五人に相談をした。五人は口を揃えて「昔から大臣や参議以上の地位に在った者の首が(見せしめの為に)都大路を引き回された例が有りません。まして平家の方々は現役の安徳天皇外戚親類として朝廷に仕えていたのですから、源氏の武将に過ぎない源範頼・源義経が要求しても、お許しになるべきでは有りません…」と答申をしたので、法皇は其のように裁定をし、源氏側に申し渡しをした。

是に対し範頼と義経は(鎌倉の頼朝に怒られるのを恐れたのか)「源氏にとって平家は保元の乱を思えば祖父・為義の仇、平治の乱を思えば父・義朝の敵(かたき)です。(私たちは)法皇の御怒りをお鎮めすると共に父祖の恥辱をそそぐ為に身命を賭して朝敵を滅ぼす努力をしています。

此処で平家の首渡しが出来なければ今後は何の為に合戦を続けるのか其の意義が無くなります…」と正論のようにも聞こえ無くはない勝手な理屈を言い出して「首渡し」の実現を望んだ。

範頼と義経がしつこく要求するので、さすがの法皇も根負けをして、遂に首の移動・展示を許すことになった。当日は平家に同情をする者を含めて大勢の者が見物したのだが、平家一門が朝廷と繋がって権勢を誇っていた時代には恐れて近づかなかった人たちも、さすがに首だけで都大路を行く平家首脳部の哀れな姿を見て、誰もが気の毒に思い同情の涙を流

していたのである。

その頃、中将維盛の北の方が潜んでいた大覚寺からも、若君（六代御前）に付き従う齋藤五、齋藤六の兄弟（巻第七「維盛都落」に登場）が気掛かりになって目立たぬように貧しい身なりで様子をみに来た。見物できるのは首だけであるが、齋藤兄弟は平家一門の人たちを見知っていたので人違いはしない。行列の中に三位中将維盛は居なかった（該当する首は無かったけれども、平家一門を認識出来たので、流れる涙を隠しきれない。泣いていて役人などに咎められては一大事であるから逃れるようにして大覚寺へ戻った。北の方は待ちかねていて「どうであつたか？」と尋ねられた。齋藤兄弟は「小松殿（平重盛）の君達（御子息）では備中守殿（師盛＝維盛の弟）の御首が見えませんでした。その他は誰其れのお首？」と申し上げたので北の方は「…どなたも身近な方ばかりで他人事とは思えない…」と涙にむせばれた。暫くして齋藤五が涙を抑えながら答えた。

「私は此のところ身を隠していましたから役人たちにも顔は知られて無いと思ひ、もう少し良く見ようと思ひましたが、見物人の中に（戦場から逃げて来たのか？）一の谷合戦の様子を詳しく知っている者が居り、その者の申しますには、小松殿の君達（御子息）は、今度の合戦で播磨と丹波の境になる三草山の守備に當っておられました。其処は源九郎義経の軍勢に攻め破られて、新三位中将殿（資盛）、小松少将殿（有盛）、丹後侍従殿（忠房）は播磨高砂から船で讃岐の屋島に渡られたと言ひことです。しかし、どうして離れられたか御兄弟の中で備中守殿だけが一の谷で討たれてしまわれた…らしいのです」

そこで「…では、小松三位中将殿の消息は？」と尋ねたところ「…（中将殿は）合戦の始まる前から重い病気になるれて御養生の為に屋島に留まつて居られ

たので、一の谷の合戦には参加して居られませんが」と言う答えでした」と申し上げた。

北の方は「…其の御病氣も（出陣前に）私が余りにも嘆き悲しんだので、それを案じられてのことであろうか？…風の吹く日は、もしやこの様な時に船に乗って苦しい思いをされては居ないであろうか？…戦さと聞けば討死などなさらぬか、と想像をしていたけれども、御病氣と聞いては余計に心配になる…誰か安心して任せられる者がお傍についているのであろうか？…詳しい話が聞きたい」と言われた。若君、姫君も「御病氣のことを詳しく聞くことは出来ないのか？」と問われた。その心情は哀れである。（其の時点で平家一族は朝敵にされてしまったのであるから無理な話だが…）

一方、屋島に居たらしい三位中将こと平維盛も妻子を思う気持ちと同じであり「都に残した者達も、さぞ心細い日々を送っているであろう。展示された首の中に私の首が無くては或いは水に溺れて命を落とし、矢に當つて死ぬこともある。生存しているとは思つても居ないで有ろうから、露のように儂（はかな）い命ではあるが、未だ生き長らえていることを知らせて置こう」と思い立ち、仕える武士に三通の手紙を持たせ都に使わした。

先ず北の方に宛てた文には「都には（平家の）敵が満ちていて（そなたの）身の置き所も無い中に幼い子を連れて苦労をして居られるであろう。此方に迎えて一緒に暮らそう…とも思つたのだが自分一人ならば耐えられるが、貴女に不安・不自由なことは、させられない…」などと細々とした心配が書かれていて、文末には「いづくとも知らぬ逢う瀬の藻塩草（もしおぐさ＝古代の製塩に使う海草）書き（掻き）おく跡を形見ともせよ」と歌が添えてあり、幼い子たちには「心の晴れない日々を過（こ）して居るであろう…早く迎え

に行きたい…」と、同じ文面の手紙を別々に届けさせた。

当然のことだが、郵便物を受け取つた妻子は喜んで良いのか悲しむべきか複雑な気持ちで取り敢えずは嘆き悲しむばかりは無い。使ひの者は周囲の目を気にしながら四、五日間滞在して、北の方が「よく書いた手紙を預かり、戻ることにした。若君、姫君も筆を持つて「父上に何と返事を申しあげましょうか？」と訊ねたので、北の方は「どんなことでも自分の思うことを書きなさい」と小学校の先生が言うように答えるほかは無い。子供は正直であるから「…何で父君は迎えに来て下さらないのですか？早く迎えに来て下さい」と、無理な注文を涙ながらに書いた。

此の手紙を預かつた使ひの者は密かに都を発ち屋島に戻つた。維盛は先ず幼い子たちの文を開いて、どうしようもない悲しさに打ちひしがれた。「…此の手紙を見ては現世を捨てて出家する気にもなれない（病身なので合戦にも出られず）身を捨てて極楽浄土を願う心にも迷いが出る。出来るならば、是から都に戻り（四国から紀州に渡り、山間の道を辿つて）恋しい妻子の姿を見てから自害をするほかは無いのであろうか？」と涙ながらに悲壮な決意をするばかりであつた。

内裏女房（だいにりにようぼう）のこと

合戦の後遺症が語られた後に「内裏女房」が出てくるのは場違いのようにも思われるが、この話も平家にとっては重すぎる不治の後遺症である。一の谷で捕らえられた本三位中将重衡は、一週間ほど経つてから六条大橋を西から東に渡された。一般の捕虜とは違つて徒歩では無く紋が付いた高級車に乗せられているが、窓や扉を開放し見物人から良く顔が見

えるようにした刑罰の「晒し者」であるから喜ばない。前後は屈強な源氏の武士三十余騎が警護しており、指揮を執るのは源頼朝の腹心・土肥（とい）次郎実平である。此の武將は平将門の従兄弟の子（平国香の弟の孫）に当り、先祖は茨城県人なのである。当日は黒みを帯びた黄赤色の軽い武装をしていた。

この様子を一目見ようと、京都中の人々が押しかけたのだが、誰もが「ああ、何とお気の毒な！いかなる罪の報いであろうか？平家一門は大勢居るのに、この方だけが惨め（みじめ）な姿を晒されるとは：重衡卿は入道殿（清盛）にも二位殿（時子）にも気に入られた自慢の御子であり、寵愛された御子であったから、平家一門でも特に重きをなしていた。法皇の許にも天皇の許にも出仕されたときには、誰もが席を空けてお迎えしたのである。それが此の様な目に遭うのは南都を滅ぼし諸寺院を焼き払った（巻第五・奈良炎上）罰なのであるか？」と言いつつ合っていた。

平重衡は六条大路を東へ鴨河原まで行進させられたから、同じコースを引き返し八条堀河の中御門中納言藤原家成（故人）が住んでいた屋敷内の堂に収容された。それを土肥実平が護っていた。

此の状況は後白河法皇にも報告され、使者として巻第四「源氏揃」で高倉天皇即位のビデオ撮影をした藏人左衛門権佐（くらんどさえもんごんのすけ）藤原定長がやって来た。恰好をつけて朝廷出仕に着る紅い衣装に帯剣という正装で来たから重衡も紺系統の正装で迎えさせられた。

重衡にしてみれば、平家全盛時代には名前さえ知らないぐらいの存在であった定長が偉そうな格好で来たのを腹立たしくも思っていたが、法皇の使いであるから丁寧に接しなければならず、冥土で閻魔大王の家に会うような嫌な気分にはさせられていた。その定長が法皇の言葉として次のような重大なこと

を言い出した。

「…三位中将平重衡が釈放され平家の居る屋島へ戻りたければ平家一門に申し入れて、安徳天皇が抱えている“三種の神器”を都の後鳥羽天皇に返還するようにしなさい。それが実現すれば重衡は無事に屋島へ戻れる：法皇は、其の様な御意向である」刑事もののドラマで誘拐犯人が述べるセリフのようだが、定長はそのように伝えた。

重衡は驚いて「この重衡のような者の命が千人分でも一万人分でも、皇位の象徴である三種の神器と交換できるなどとは、兄・宗盛以下平家の誰も思わないでしょう。相手が女性であれば、例えば母の二位（清盛未亡人の時子）などは思い付くかも知れませんが：しかしながら法皇の御意向に背くことは出来ませんので一応は（平家方に）申し入れてみましょう！」と答えた。

その結果、此の交渉の担当者として二人の者が選ばれた。三位中将平重衡の使者（代理）は、昔から平家に仕えていて当時は合戦に加わって居なかったと思われる平三左衛門重国という人物であり、法皇の使者は花方という下級役人（取次役）である。皇位の象徴を返させる交渉に下つ端役人を充てる法皇は最初から此の取引を実現不能と予測していたことになり。当日は、個人的な手紙が許されなかったので、重衡は北の方への伝言を重国に頼んだ。それは「旅の空（平家が各地を放浪中）でも貴方は私に慰められ私は貴女に慰められていたのに別れてからは悲しい思いをしているでしょう。夫婦の契りは来世に及ぶと言うから後の世では必ず再見出来ると信じています」と言う涙ながらの伝言であった。頼まれた重国は涙を抑えて交渉に向かったのである。

使者が発つてから八条女院（鳥羽天皇皇女）に仕える木工右馬允知時（むくうまのじょうともとき）木工寮と馬寮

の判官職を兼ねた者、七位が土肥実平を訪ねて来て「私は以前に中将殿（重衡）に仕えていました。本来は平家に従つて西国に行く立場でしたが、女院に仕える身で叶わず都に留まりました。此の度、重衡殿を大路に見掛けて誠に気の毒でたまりません。もし、お許しを頂けるならば、お目に掛かつて昔の話などしてお慰めしたいと思えます。私は武士としては中途半端な身分なので合戦のお供は出来ず、平家全盛時にも朝夕に参上して御挨拶するだけの関係でした。もし不審に思われるならば腰の太刀をお預けします。どうか、面会をさせて下さい」と申し入れた。

源平盛衰記では八条女院が知時の為を思つて西国行きを止めくれた：となつている。融通の効かない武士だと「ダメ！」で終わるのだが土肥実平は情けの有る武將なので「貴方一人が逢われても問題は無いでしょう。念の為に太刀は預かります」と言つて許してくれた。知時は喜んで収容所を訪ねると重衡は何かを深く考え込んでいる様子で痛ましく感じられ、知時は先ず涙を抑えることが出来なかった。重衡も其れに気付いて（面会に来てくれたことが夢のようで）暫くは言葉にならず二人共に泣くよりほかはなかった。

時間が経つて二人は漸く言葉を交わし、あれこれと平家全盛時代の話をしていたが重衡は思いだしたように「…そう言えば、知時が紹介してくれて（私が）交際していた女性は未だ宮中に勤務しているのか？」と聞いた。「…その様に聞いております」と答えると、重衡は「（平家が）都を離れる時に（急なことなので）知らせませず、別れの手紙も書かずに出発してしまつた。現世はもとより来世までも（甘い言葉で）誘つたことが嘘に思われるのは恥ずかしい。事情を説明して置きたいが届けてくれるか？」と、囚人らしからぬことを言い出した。知時が「必ず届けます」と答

えたので重衡は喜んで恋文を書いた。此の様子を見ていた監視役の武士たちは、自分たちの悪口でも書かれたかと警戒して知時が退出する時に「どのような手紙が見せよ！」と要求した。

東国の武骨な武士が公家の手紙を見ても理解は出来ないと思うが、重衡が自分で「見せる」と言ったので知時は見せた。正室（北の方）の心配をしたり、愛人にラブレターを書いたり、捕虜になっても公家は女性問題で忙しい。暗号も使われていない文なので検閲は無事に済んで、知時は其の手紙を持って内裏に侵入したが、昼間は人目もあるため空き部屋に隠れていて日が暮れてから手紙を渡す機会を窺っていた。

其処に、訪ねる女性と思われる話声が聞こえて「平家の方は大勢いるのに三位中将だけが捕らえられ引き回しをされたことは悲しい！人々は奈良を焼いた（その指揮をした）罪の報いだと言うけれども中将は、自分は焼くつもりは無かったが軍勢の中に無頼の者が居り、それらが勝手に火を付け回って多くの堂塔を焼いてしまった。新古今集にある”末の露もとの雫や世の中の遅れ先立つためしなるらむ”の歌のように、結局は自分一人の罪になるのであろう」と嘆いておられた」と恨みごとを言いながら泣いている様子が知れた。

知時は、此の女房も重衡のことを想い続けているのだと知って気の毒に思い、自分が隠れていたことを忘れて「御免下さい！」と挨拶をした。相手は驚いた様子で「どなたですか？」と聞いた。「三位中将殿からの手紙を預かって来た者です」と答えると、普段ならば容易に面会などしない宮中勤務の女房が余程、思い詰めていたようで「……どこに、どこに……」と言いながら走り寄って来て自分から手紙を受け取り、其れを開いて見た。手紙には、重衡が合戦で捕

らわれた状況から明日を知らない運命のことなどが細々と書いて有り奥に一首の歌が綴られていた。

「涙河うき名を流す身なりとも
いま一たび（度）の逢瀬ともがな」

是を見た女房は、言葉にならず手紙を懐中に入れて只々、泣くばかりであったが鶏では無いので宮殿内で何時までも鳴き続ける訳にもいかず、返事の手紙を気が晴れない状態で書き綴った。文末には心の中を示す歌が添えてあった。

「君ゆえに我も浮き名を流すとも」

底の水屑と共に成りなむ」

使者の知時は重衡の收容先に戻った。今度も警護の武士が（返事の手紙を見せろ！と言うので見せたけれども歌の真意など分からないから咎められずに済んだ。返事を受け取った重衡は女房への想いが募り、土肥実平に「長年連れ添ってきた女房に今一度、逢って言い残したいことがあるのだが何とかならないでしょうか」と頼んでみた。普通の武將だと許してくれない要求であるが、又も実平は「相手が女性ならば問題は無いでしょう」と許可してくれた。重衡は大いに喜んで、レンタカーと言っても牛車であるが、其れを宮中に差し向けて女房を呼び寄せた。

やがて女房を乗せた車が着くと看守が其れを殿舎外側の濡れ縁に着けさせた。其の知らせを受けた重衡は大急ぎで駆け付け、車の中の女房に「東国の武士たちが見ているから降りてはいけない」と言い、自分から車の簾（すだれ＝扉の代り？）に近づき、女房の手をとり顔に顔を押し当てて暫くは言葉も出さず、二人は涙にくれるばかりの状態であった。暫くして重衡は「西国に下って行く時に会って別れを惜しみ

たかったが、事態が差し迫っていたので連絡もせずに行ってしまった。其の後は集団移動と合戦の連続で虚しく歳月を送るばかりになり便りも出来なかつた。今は捕らわれの身であり、もう二度と会う事も出来ない」と、着衣の袖を顔に押し当ててしまった。女房も同じことで、お互いの心が推し量られて哀れである。

た。今は捕らわれの身であり、もう二度と会う事も出来ない」と、着衣の袖を顔に押し当ててしまった。女房も同じことで、お互いの心が推し量られて哀れである。

その中に日も暮れてきたので、重衡が「近頃は都の治安も悪く、夜の大路も物騒……」と女房に帰ることを勧め、車の運転手（牛飼）に出発を命じた。車が動き出すと重衡が涙ながらに詠んだ。

「逢うことも露の命ももる共に」

今宵ばかりや限りなるらむ」

是に對して女房は涙を抑えて返歌をした。

「かぎりとして立ち別れるれば露の身の」

君より先に消えぬべきかな」

源平盛衰記では傍線の部分が「……別れなば……」になっている。其れは兎も角として、この様にして女房は内裏に戻ったが、其の後面会が許されなかったので、止むを得ず二人は文通だけが続けたのである。

此の女房は民部卿（現代で言えば厚生労働大臣）入道親範の娘で、容姿美貌優れ、情け深い女性であった。源平盛衰記に依れば平治の乱で殺害された藤原信西の孫で「中納言局（ちゅうなごんのつぼね）」と称し琵琶・琴の名手、書・絵画・和歌などに優れた女性で重衡との間に子が一人あつた……としている。重衡が奈良で斬られた後に仏門に入ったよう、原本には「濃き墨染（法衣）にやつれ果て彼の後世菩提をとぶらわれけるこそ哀れなれ」とある。（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>